イーディス・ウォートンとモダニスト・ノスタルジア

新井景子

はじめに

イーディス・ウォートンは、ヘンリー・ジェイムズが確立した心理リアリズム小説の後継者とされ、従来モダニズム作家の範疇には入れられてこなかった。ウォートン自身、創作に関するエッセーや手紙において、モダニズム的な実験に否定的な見方を示していることも、その一因と言えるだろう。一方、1907 年からパリに住んでいたウォートンは、モダニズムの大きな牽引力ともなる第一次世界大戦を間近で経験していた。開戦直後から慈善活動に精力的に取り組んでいた他、前線を数回訪問し、戦争のルポルタージュやアメリカの参戦を促すプロパガンダ的な文章を本国に書き送っている。自伝 *A Backward Glance* でも、「自分の育った世界が 1914 年に破壊されてしまった」（*Novellas* 1057）と綴っており、モダニズムの作家たちと時代感覚を共有していたとも言える。このように、モダニズム文学の理論至上主義的な側面には否定的でありつつ、モダニズム的な時代感覚を共有するウォートンについて、反モダニズムというウォートンの従来の評価を問い直す動きもみられる。また近年モダニズムという概念自体が再考される中で、女性作家とモダニズムの関係もまた問い直されてきている。

そこで本発表では、第一次世界大戦中および直後に執筆された *Summer*（1917）と *The Age of Innocence*（1920）を取り上げ、「ノスタルジア」を軸にウォートンとモダニズムとの関係を再考する。ウォートンはこの 2 作品について、第一次世界大戦からの逃避として書いたと語っており（*Novellas* 1046, 1056）、特に *The Age of Innocence* については、1870 年代のオールド・ニューヨークを回顧する形で忠実に描き出していることから、ウォートンをモダニズムと相反する作家と位置付ける方向性を促進したように思われる。だが、ウォートン作品にみられる「過去への回帰」は、逃避的なノスタルジアにすぎないのだろうか。Tammy Clewell は、多くのモダニズム作品の中に「失われた家、他者、歴史といった理想化された記憶」とは異なる「モダニスト・ノスタルジア」が見られるとし、「後ろ向きの衝動と前向きの衝動との間の緊張の中に、モダニズムの作家たちは過去を現在と対話させる生産的な対話の可能性を見出してきた」と述べている(1)。本発表では Clewell の論を土台に、*Summer* と *The Age of Innocence* の中の一見モダニズムと相反するように見える回帰的な側面の中に、過去と現在の断絶やその関係性を模索する、ウォートンのモダニスト的な感覚が見出せるのではないかとの立場から考察を進める。

Summer における Old Home Week と感傷的なノスタルジアへの批判

ニューイングランドの小さな田舎町ノースドーマーを舞台に、主人公のひと夏の恋を描いた *Summer* において、物語冒頭でチャリティと出会うニューヨーク出身の建築家ハーニーは、チャリティにとって都会のモダンな生活を象徴する存在であると同時に、過去に価値を見出すという新たな視点をもたらす人物でもある。植民地時代の古い建築のスケッチに加え、ハーニーが熱心に取り組むのが、Old Home Week の祝賀会である。世紀転換期に、故郷や家族の元に戻る祝賀会としてニューイングランド各地で制度化された Old Home Week は、失われつつある過去への郷愁を感傷的に喚起することで均一的かつ保守的な価値観を強化した。*Summer* の中で描かれるノースドーマーの Old Home Week の祝典でも、都会から帰京した観客が見守る中、白いドレスを着た未婚の娘たちが “Home Sweet Home”を歌い、町の名士たちが、古き良き伝統や家庭性を称えるスピーチをする。この保守的な過去礼賛ともいえるイベントの日に、ハーニーが婚約者アナベルと一緒にいる様子がチャリティに初めて目撃されるのは象徴的である。彼はチャリティにマウンテンの出自を肯定的に見る視点を与えつつ、結局保守的な社会的慣習の中にとどまる人物として示されているのである。

一方ウォートンは、Old Home Week に示される退行的なノスタルジアのイデオロギーを崩してもいる。独立記念日の夜、都会のネトルトンでハーニーと花火を楽しんだチャリティは、養父ロイヤルが秘密結社の仲間や売春婦と共に行動しているところに遭遇するが、そこでノースドーマー出身の売春婦ジュリアは「Old Home Week みたいね」 (*Novellas* 232)と発言する。町の規範から外れたジュリアを通して町の保守性や閉鎖性が垣間見えると共に、ロイヤルとチャリティの、養子でありつつ法的には養子ではないという複雑な関係性を通して、Old Home Week という装置が作り出す牧歌的なノスタルジアの在り方が揺るがされるのである。

Old Home に戻るという「ノスタルジア」のモチーフは、未婚で妊娠したチャリティが初めて母に会いにマウンテンに戻るシーンでも前景化されるが、チャリティの母は彼女が到着する直前に亡くなっており、感傷的な親子の再会といった場面はない。さらに母メアリーの死体は、「人間らしさの痕跡がまったくな」く、「溝の中で死んだ犬」のようだと描写され、戦争のイメージを喚起させる(*Novellas* 290)。貧しさと惨めさを極めた無法地帯であるマウンテンは、戦争で破壊された村々あるいは難民キャンプを彷彿とさせる場として描かれており、マウン

テンを後にするチャリティは「難民」にたとえられている(*Novellas* 302)。

戦争のイメージを伴って描かれるチャリティと母との間の「断絶」は、世紀転換期のアメリカで感傷的に構築されたノスタルジアの概念を批判的に崩す役割を果たしているが、その一方で興味深いのは、チャリティと母との間に親子の連続性も示されているという点である。小説の前半で、ロイヤルはハーニーに向かって、チャリティの母が喜んで子供を捨てた非人間的な女性だと話すが、一晩マウンテンで過ごしたチャリティは、子供の幸せのために子供を手放した母親の気持ちを初めて理解する。家父長的な男性の説明とは異なる母親像が示されることで、一時的にせよ女性同士の連帯や共感が家父長制を転覆させているのである。さらに、失われた母に対するチャリティの半ば感傷的な追憶と自らの子供に対する思い、つまり過去に向かう方向性と、未来に向かう方向性が共存しているという点で、Clewell が示すモダニスト・ノスタルジアの在り方が見出されるとも言える。

作品は、チャリティがロイヤルと結婚し、ノースドーマーの家に戻るという一見回帰的な方向で終わる。しかし、マウンテン出身で私生児を身ごもっているチャリティとロイヤルとの結婚がハイブリディティというモダンな要素を表しうること、またロイヤルが Old Home Week でのスピーチで、故郷に戻らざるを得なかった人々に向け、帰郷して故郷を新しく改善することを説いていることを考えれば、本作品の結末は、回帰的な方向性を持ちつつ、新しさへの方向性も示しうる、双方向的なものとして描かれているとも考えられる。

The Age of Innocence におけるモダニスト・ノスタルジア

The Age of Innocence でも、*Summer* にみられた断絶と連続性、あるいは回帰しつつ新しさへ向かうという、相反する方向性の共存が見出せる。本作品で特徴的なのは、最終章が 1870 年代から 30 年ほど後の時代に設定されていることである。ウォートンは当初、ニューランドとエレンの恋愛が成就したのち破局するという内容で 3 パターンを考えていたが、実際の小説では二人の恋愛は成就することなく終わる(Ammons 444)。つまり、男女関係を描く心理リアリズム小説として構想されていた本作品の主眼は、時代の変化を描くことにシフトされたとも言えるだろう。最終章では、ニューランドの視点を通した過去の回想と、電話や船といった「現在」のテクノロジーへの言及が交互に現れることで、空間認識の変化と共に、過去と現在の変化が鮮やかに示される。その変化の中心に置かれるのが、ニューランドと息子ダラスの考え方の違いである。社会の慣習の前に個人の思いを抑圧したニューランドの世代とは異なり、息子ダラスは自分の望む通りに行動し、父の時代であれば慣習から外れているとみなされるような相手と、いわばハイブリッドともいえるような婚約をするのである。

このように時代の断絶を前面に置く一方、ウォートンはその間に連続性をも見出そうとしているように思われる。それを担うのが、過ぎ去った過去を悼みつつ新しさも評価するニューランドである。彼が正しくメイやエレンを理解できていなかったことがアイロニカルに描かれる一方、最終章で語り手は、ニューランドがオールド・ニューヨークでは紳士が従事することのなかった政治の世界に携わったことや新しい市民活動に従事したことに言及し、彼が「よき市民」になったと語る（*Age* 207）。*Summer* の中でロイヤルが言及するように、都会から失意のうちに故郷に戻るということではないものの、ニューランドもまた、大きな世界に出るという夢を絶たれ、故郷から永遠に出ることのできない状況に立たされたと言えるが、彼は「よき市民」として、故郷を新しく改善していくために行動した人物として描かれている。当初の構想を変更したことで、1870 年代のオールド・ニューヨークを描いた本作品は、単に逃避的な過去への回帰ではなく、過去と未来の両方向へと引かれながら過去と現在の関係性を模索する、モダンな感覚を内在化させた作品になったのではないだろうか。

以上のように、第一次世界大戦中および直後に書かれた *Summer* と *The Age of Innocence* には、大戦による過去との断絶というモダニスト的な感覚を持ちつつ、そこに連続性を見出そうとするウォートンの模索が見られる。過去の伝統を壊して新しいものを作るという狭義のモダニズムの在り方とは異なるものの、ウォートン作品における過去への回帰は、新しいものを生み出す方向性とつながっているのであり、そのような意味でウォートンを反モダニズムの作家としてではなく、モダニズムへ向かう流れの中に置くことも可能なのではないだろうか。

引用文献

Ammons, Elizabeth. “Cool Diana and the Blood-Red Muse: Edith Wharton on Innocence and Art.” Wharton, *The Age of Innocence.* 433-47.

Clewell, Tammy. “Introduction: Past ‘Perfect’ and Present ‘Tense’: The Abuses and Uses of Modernist Nostalgia.” *Modernism and Nostalgia: Bodies, Locations, Aesthetics*, edited by Tammy Clewell. Palgrave Macmillan, 2013. 1-22.

Wharton, Edith. *Novellas and Other Writings:* Madame de Treymes, Ethan Frome, Summer, Old New York, The Mother’s Recompense, A Backward Glance. Library of America, 1990.

---. *The Age of Innocence*, edited by Candace Waid. Norton, 2003.